風は草木に
いさやかた

POEMES·YAMAMURA

此の書を祖國のひと
びとにおくる

Mon Père

Mon Père

なんぢはなんぢの面に
汗して生くべし

人間の勝利

人間はみな苦んでゐる
何がそんなに君達をくるしめるのか
しつかりしろ
人間の強さにあれ
人間の強さに生きろ

くるしいか
くるしめ
それがわれわれを立派にする
みろ山頂の松の古木(こぼく)を
その梢が烈風を切つてゐるこころを
その音の痛痛しさ
その音が人間を力づける
人間の肉に喰ひいるその音(ね)のいみじさ
何が君達をくるしめるのか

自分も斯うしてくるしんでゐるのだ
くるしみを喜べ
人間の強さに立て
耻辱を知れ
そして倒れる時がきたらば
ほほゑんでたほれろ
人間の強さをみせて倒れろ
一切をありのままにじつと凝視めて
大木のやうに倒れろ

これでもか
これでもかと
重いくるしみ
重いのが何であるか
息絶えるとも否と言へ
頑固であれ
それでこそ人間だ

自序

自分は人間である。故に此等の詩はいふまでもなく人間の詩である。

自分は人間の力を信ずる。力！　此の信念の表現されたものが此等の詩である。

自分は此等の詩の作者である。作者として此等の詩のことをおもへば其處には憂鬱にして意地惡き暴

風雨ののちに起るあの高いさつぱりした黎明の蒼天をあふぐにひとしい感覺が烈しくも鋭く研がれる。實(まこと)にそれこそ生みのくるしみであつた。

生みのくるしみ！　此のくるしみから自分は新たに日に日にうまれる。伸び出る。此のくるしみは其上、強い大膽なプロメトイスの力を自分に指ざした。遠い世界のはてまで手をさしのべて創世以來、人間といふ人間の辛棒づよくも探し求めてゐたものは何であつたか。自分はそれを知つた。おお此のよろこび！　自分はそれをひつ摑んだ。どんなことがあつ

ても、もうはなしてはやるものか。

苦痛は美である！　そして力は！　力の子どもばかりが藝術で、詩である。

或る日、自分は癲癇的發作のために打倒された。それは一昨々年の初冬落葉の頃であつた。而もその翌朝の自分はおそろしい一種の靜穩を肉心にみながら既に、はや以前の自分ではなかつた。

それほど自分の苦悶は精神上の殘酷な事件であつ

た。

此等の詩は爾後つひ最近、突然喀血して病床に横はつたまでの足掛け三ヶ年間に渉る自分のまづしい收穫で且つ蘇生した人間の靈魂のさけびである。

一莖の草といへども大地に根ざしてゐる。そしてものの凡ゆる愛と匂とに眞實をこめた自分の詩は汎く豊富にしてかぎりなき深さにある自然をその背景乃至内容とする。そこからでてきたのだ、譬へばおやへびの臍を嚙みやぶつて自ら生れてきたのだと自分の友のいふその蝮の子のやうに。

自分は言明しておく。信仰の上よりいへば自分は一個の基督者である。而も世の所謂それらの人々はそれが佛陀の歸依者に對してよりどんなに異つてゐるか。それはそれとして此等の詩の中には神神とか人間の神とかいふ字句がある。神神と言ふ場合にはそれは神學上の神神ではなく、單に古代ギリシャあたりの神話を漠然とおもつて貰はう。また人間の神とあればそれは無形の神が禮拜の對象として人格化されるやうに、これは正にその反對である。其他これに準ず

最後に詩論家及び讀者よ

此の人間はねらつてゐる。光明思慕の一念がねらつてゐるのだ。ひつつかんだとおもつたときは概念を手にする。これからだ。これからだ。何時もこれからだとは言へ、理智のつぎはぎ、感情のこねくり、そんなものには目もくれないのだ。捕鯨者は鰯やひらめにどう値するか。

……何といふ「生」の嚴肅な發生であらう。此の發生に赫耀あれ！

自序

人間の勝利……一
I
穀物の種子……三
彼等は善い友達である……六
父上のおん手の詩……九
或る朝の詩……

曲つた木……一〇
ランプ……一二
夜の詩……一一
遙にこの大都會を感ずる……一五
何處へ行くのか……二〇
梢には小鳥巢がある……二二
春……二三

II

萬物節……二五
種子はさえづる……二七

或る雨後のあしたの詩……九二
十字街の詩……三一
ポプラの詩……三五
風の方向がかわつた……三八
翼……四一
針……四三
としよつた農夫は斯う言つた……四五
よい日の詩……五一
朝朝のスープ……五三
或る時……五八

III

其處に何がある……五九
憂鬱な大起重機の詩……六一
耳をもつ者に聞かせる詩……六六
人間に與へる詩……六八
わすれられてゐるものについて……七〇
寢てゐる人間について……七三
子どもは泣く……七六

IV

人間の午後……七九
雨の詩……八一

荷車の詩……八四
歡樂の詩……八六
海の詩……八八
ザボンの詩……九〇
此處で人間は大きくなるのだ……九二
郊外にて……九四
波だてる麥畑の詩……九七
刈りとられる麥麥の詩……一〇一
都會にての詩……一〇四
大鉞……一〇六
一本のゴールデン・バット……一〇八
記憶について……一一〇
收穫の時……一一二

くだもの……一一四

V

キリストに與へる詩……一一五
或る淫賣婦におくる詩……一一八
溺死者の妻におくる詩……一二六
大きな腕の詩……一三二
先驅者の詩……一三五

VI

秋ぐち……一三七
此の世界のはじめもこんなであつたか……一四〇
ひとりごと……一四二
新聞紙の詩……一四五
瀘車の詩……一四八
都會の詩……一五一
都會の詩……一五三
握手……一五六
故郷にかへつた時……一五九
太陽はいま蜀黍畑にはいつたところだ……一六〇

VII

自分はさみしく考へてゐる……一六三
蝗……一六五
愛の力……一六八
人間の神……一七〇
秋のよろこびの詩……一七三
草の葉つぱの詩……一七六
或る風景……一七八
雪ふり蟲……一八一
冬近く……一八二
蟋蟀……一八四
或る日の詩……一八六
或る日の詩……一八五
記憶の樹木……一九〇

VIII

山……一九二
道……一九四
初冬の詩……一九五
路上所見……一九六
友におくる……一九七
惡い風……一九八
雪の詩……二〇〇
世界の黎明をみる者におくる詩……二〇三
自分は此の黎明を感じてゐる……二〇五

偉大なもの……二〇八
強者の詩……二〇九
病めるものへ贈物としての詩……二一三
或る日曜日の詩……二一六
朝の詩……二一九
大風の詩……二二一
農夫の詩……二二二
人間の詩……二二五
姙婦を頌する詩……二三六
妹におくる……二四〇
十字架……二四二
鞴祭の詩……二四四
鴉祭の詩……二四七

貧者の詩……二五〇
單純な朝餐……二五二

IX

そこの梢のてつぺんで一はの鶏がないてゐる……二五五
雨は一粒一粒ものがたる……二五八
麥畑……二六一
朝……二六四
人間苦……二六七
わたしたちの小さな畑のこと……二七一
一日のはじめに於て……二七四

自分達の仕事……二七七
消息……二七九
感謝……二八一
勞働者の詩……二八三
老漁夫の詩……二八六
驟雨の詩……二九一
苦惱者……二九三
朝あけ……三〇七

X

生みのくるしみの頌榮……三〇九

あかんぼ……三一二
風景……三一四
疾風の詩……三一六
友におくる詩……三一九
自分はいまこそ言はう……三二一
歩行……三二三
家族……三二六
薄暮の祈り……三二九

跋……（土田杏村）

後より來る者におくる……三四九

I

穀物の種子

と或る町の
街角の
戸板の上に穀物の種子をならべて賣つてゐる
老嫗さんをみてきた
その晩、自分はゆめをみた
細い雨がしつとりふりだし

種子は一齊に青青と
芽をふき
ばあさんは蹙め面をして
その路端に死んでゐた

彼等は善い友達である

結氷したやうな冬の空
その下で渦捲く烈風
山山は雪でまつ白である
晝でもほの暗い
ひろびろとした北國の寒田に
馬と人と小さく動いてゐる

はるかに遠く此處では
馬と人と
なんといふ睦じさだ
そして相互(たがひ)に助けあつて生きてゐる
寒田は犂きかへされる
犂きかへされた刈株の田の面はあたらしく黑
黑と
その上に鴉が四羽五羽
どこからきたのか
此のむごたらしい景色の中にまひおりて

鴉等は鳴きもせず
けふばかりは善い友達となつて働いてゐる
なにを求めて馬や人といつしよになつてゐる
のか
それが此處からはつきり見える
田の畦の枯れたやうな木木までが苦痛を共に
してゐるやうだ

父上のおん手の詩

そうだ
父の手は手といふよりも寧ろ大きな馬鋤だ
合掌することもなければ
無論他人のものを盗掠めることも知らない手
生れたままの百姓の手
まるで地べたの中からでも掘りだした木の根

つこのやうな手だ
人間のこれがまことの手であるか
ひとは自分の父を馬鹿だといふ
ひとは自分の父を聖人だといふ
なんでもいい
唯その父の手をおもふと自分の胸は一ぱいに
なる
その手をみると自分はなみだで洗ひたくなる
然しその手は自分を力強くする
この手が母を抱擁めたのだ

そこから自分はでてきたのだ
此處からは遠い遠い山の麓のふるさとに
いまもその手は骨と皮ばかりになつて
猶もこの寒天の痩せた畑地を耕作してゐる
ああ自分は何にも言はない
自分はその土だらけの手をとつて押し戴き
此處ではるかにその手に熱い接吻をしてゐる

或る朝の詩

冬も十二月となれば
都會の街角は鋭くなる……

曲つた木

うすぐらい險惡な雲がみえると
すぐ野の木木はみがまへする
曲りくねつた此の木木
ねぢれくるはせたのは風のしわざだ
そしてふたたびすんなりとは
どうしてもなれない

そのかなしさが
いまはこの木の性となつたのか
風のはげしい此處の曲りくねつた頑固な木木
骨のやうにつつぱつた梢にも雨が降り
それでも芽をつけ
小鳥をさえずらせる
まがりなりにも立派であれ
ああ野にあつて裸の立木
ああ而もなほ天をさす木木

ランプ

野中にさみしい一けん家
あたりはもう薄暗く
つめたく
はるかに遠く
ぽつちりとランプをつけた
ぽつちりと點じたランプ

ああ
何といふ眞實なことだ
これだ
これだ
これは人間をまじめにする
わたしは一本の枯木のやうだ
一本の枯木のやうにこの烈風の中につつ立つて
ランプにむかへば自ら合さる手と手
其處にも人間がすんでゐるのだ

ああ何もかもくるしみからくる
ともすれば此の風で
ランプはきえさうになる
そうすると
私もランプと消えさうになる
こうして力を一つにしながら
ランプも私もおたがひに獨りぼつちだ

夜の詩

あかんぼを寝かしつける
子守唄
やはらかく細くかなしく
それを歌つてゐる自分も
ほんとに何時かあかんぼとなり
ランプも火鉢も

急須も茶碗も
ぼんぼん時計も睡くなる

遙にこの大都會を感ずる

この麥畑の畦のほそみち
この細道に立つ自分をはるかに大都會も感ず
るか
けふもけふとて
砂つぼこりの中で搖れてゐる草の葉つば
ああ大旋風も斯る草の葉つばからはじまつて

やつぱり此の道をはしるのだ

ああ此の道

道はすべて大都會に通ずる

道は蔓のやうなもので そして脈搏つてゐる

まつぴるまの太陽も暗く

あたまから朦朦と塵埃をあびせかけられてゐる

る幻想

その塵埃の底にあつて呼吸づく世界きつての

大都會よ

ああ大沙漠の壯麗にあれ

ああ壯麗な大旋風

その街街の大建築の屋根から屋根をわたつて

行く

大群集の吠えるやうな聲聲

此の大都會をしみじみと

此の大沙漠の中につつ立つ林のやうな大煙筒

を

此のしづけさにあつて感ずる

何處へ行くのか

またしても
ごうと鳴る風
窓の障子にふきつけるは雪か
さらさらとそれがこぼれる
まつくらな夜である
ひとしきりひつそりと

風ではない
風ではない
それは餓えた人間の聲聲だ
どこから來て何處へ行く群集の聲であらう
誰もしるまい
わたしもしらない
わたしはそれをしらないけれど
わたしもそれに交つてゐた

梢には小鳥の巣がある

なにを言ふのだ
どんな風にも落ちないで
梢には小鳥の巣がある
それでいい
いいではないか

春

どこかで紙鳶のうなりがする
子どもらの耳は敏く
青空はひさしぶりでおもひだされた
いままで凍てついてゐたやうな頑固な手もほ
んのりと赤味をさし
どことなく何とはなしにぎやかだ

どこかで紙鳶のうなりがする
それときいてひとびとは
ああ春がきたなと思ふ
そして何か見つけるやうな目付で
水水しい青空をみあげる
てんでに紙鳶を田圃にもちだす子ども等
やがてあちらでもこちらでもあがるその紙鳶
それと一しよに段段と
子どもらの足も地べたを離れるんだ

II

萬物節

雨あがり
しつとりしめり
むくむくと肥え太り
もりあがり
百姓の手からこぼれる種子をまつ大地
十分によく寝てめざめたやうな大地

からりと晴れた蒼空
雲雀でも啼きさうな日だ
いい季節になつた
穀倉のすみつこでは
穀物のふくろの種子もさへづるだらう
とびだせ
とびだせ
蟲けらも人間も
みんな此の光の中へ！
みんな太陽の下にあつまれ

種子はさえづる

種子(たね)はさえづる
穀倉の種子のふくろで
はるがきたとてか
青空の雲雀も

それをききつけた百姓は
あわてて穀倉に驅けこみ
穀物の種子のふくろを抱きだした

或る雨後のあしたの詩

よひとよ細い雨がふり
しののめにからりとはれて
しつとりと
なにもかも重みがついた
ああ此の重み
そのおちつきが世界をうつくしくするのであ

るか
それだのに人間ばかり
何といふみすぼらしさだ
穀物の種子のふくろをだきだすその腕(うで)につた
はる
あの重みだ
あの重みにみちみてよ
ああ人間
大地と太陽とのいとし子

十字街の詩

"THIS IS THE MANY-TENTACLED TOWN"

——VERHAEREN——

ここは都會の大十字街
すべての道路はここにあつまり
すべての道路はここからはじまる
堂堂とその一角にそびえた
大銀行をみろ

その窓したをぞろぞろと
ひとはゆき
ひとはかへる
なんにもしらないるなかびとすら
此の大銀行の正面にてはあたまを垂れ
手をうやうやしくあはせる
ああ都會の心臓である十字街
都會はまるで惡食をする大魚の胃ぶくろのやうに
ここはひとびとをひきつけて

そのひとびとを喰ひ殺すところだ
そこから四方へ草の蔓のやうにのびてゆく街

街

つらなり列ぶ家家
何といふ立派なものだ
ああ此のけむり吐く大煙筒の林
此のすばらしさに帽子をとれ
へとへとにつかれながら而も壯麗に生きてゐる
る大都市
此の中央大十字街

その感覺はくもの巣のやうな大路小路にひろ
がり
ひろいひろい郊外に露出して顫え
其處で何でもかでも鋭敏に感じてゐる神經
どんなものでもひつ掴まうとしてゐる神經
その尖端のおそろしさよ

ポプラの詩

すんなりと正しくのび
うすいみどりの葉をつけた
高臺のポプラの木
その附近(あたり)から
みえる遠方はなつかしい
一本すんなり立つてゐても

五本六本列んでゐても
此の木ばかりはすつきりしてゐる
そよ風にこれがひらひらするのをみてゐると
わたしはたまらなくなる
ああ此の木のやうな心持
怖しい敏感なポプラ
冬のをはりにもう芽ぶき
秋には入るとすぐ落葉する
ああポプラ
これこそ光線の愛する木だ

子どもらは此の木のしたで遊ばせろ

風の方向がかわつた

どこからともなく
とんできた一はのつばめ
燕は街の十字路を
直角にひらりと曲つた
するといままでふいてゐた
北風はぴつたりやんで

そしてこんどはそよそよと
どこかでゆれてゐる海草(うみくさ)の匂ひがかすかに一
めんに
街街家家をひたした
ああ風の方向がすつかりかわつた
併しそれは風の方向ばかりではない
妻よ
ながい冬ぢうあれてゐた
おまへのその手がやはらかく
しつとりと

薄色をさしてくるさへ
わたしにはどんなによろこばしいことか
それをおもつてすら
わたしはどんなに子どもになるか

翼

よろこびは翼のようなものだ
よろこびは人間をたかく空中へたづさえる
海のやうな都會の天(そら)
そこで悠悠と大きなカーヴを描いてゐる一羽
の鳶
なんといふやすらかさだ

それをみあげてゐるひとびと
彼等の肩には光る翼がひらひらしてゐる
うたがつてはならない
彼等はなんにも知らないのだが
見えない翼はその躍にもひらひらしてゐる

針

子どもの寝てゐるかたはらで
その母はせつせと着物を縫つてゐる
一つの手が拍子をとつてゐるので
他の手はまるで尺取蟲のやうにもくもくと
指さきの針をすすめてゆく
目は目でまばたきもしないで凝(じつ)とそれを見て

ゐる
音すら一つかたともせず
夜はふけてゆく
なんといふしづかなことだ
子どもの寝息もすやすやと
針は自然にすすんで行く
むしろ針は一すぢの絲を引いて走つてゐるや
うだ

としよつた農夫は斯う言つた

あの頃からみればなにもかもがらりとかわつ
た
だがいつみてもいいのは
此のひろびろとした大空だけだぞい
わすれもしねえ
この大空にまん圓い月がでると

穀倉のうしろの暗い物蔭で
俺等はたのしい逢引をしたもんだ
そこで汝あみごもつたんだ
何をかくすべえ
穀倉がどんな事でも知つてらあ
そうして草も焼けるやうな炎天の麥畑で
われあ生み落とされたんだ
それもこれもみんな天道様がご承知の上のこ
つた
おいらはいつもかうして貧乏だが

われあ秣草をうんと喰らつた犢牛のやうに肥
え太つてけつかる
犢牛のやうに強くなるこつた
うちの媼もまだほんの尼つちよだつた
その抱き馴れねえ膝の上で
われあよく寢くさつた
それをみるのが俺等はどんなにうれしかつた
か
そして目がさめせえすれば
山犬のやうに吼えたてたもんだ

其處にはわれが目のさめるのを色色な玩具が
まつてただ
なんだとわれあおもふ
そこのその大きな鍬だ
それから納屋にあるあの犁と
壁に懸つてゐるあの大鎌だ
さあこれからは汝の番だ
おいらが先祖代代のこの荒れた畑地を
われあそのいろんなおもちやで
立派に耕作つてくらさねばなんねえ

われあ大え男になつた
そこの尼つ子がふりけえつてみるほどいい
若衆になつた
おいらはそれを思ふとうれしくてなんねえ
しつかりやつてくれよ
もうおいらの役はすつかりすんだやうなもん
だが
おいらはおいらの蒔きつけた種子がどんなに
芽ぶくか
それが唯一つの氣がかりだ

それをみてからだ
それをみねえうちは誰がなんと言はうと
決して此の目をつぶるもんでねえだ

よい日の詩

どこをみても木木の芽は赤らみ
すつかり赤らみ
枯葉の下から草も青青と
そしてしつとり濡れた木の下枝では
どこからともなく集つてきた鶸やのじこが囀
つてゐる

何といふ善い日であらう
友達の花嫁のまめまめしい働きぶりをみてき
た私の目のかわゆらしさよ
何がそんなにうれしいのか
お太陽様もみてゐらつしやる通り
此の山みちで
私はすこし酔つてをります

朝朝のスープ

其頃の自分はよほど衰弱してゐた
なにをするのも物倦く
なにをしてもたのしくなく
家の内の日日に重苦しい空氣は子どもの顔色
をまで憂鬱にしてきた
何時もの貧しい食卓に

或る朝、珍しいスープがでた
それをはこぶ妻の手もとは震えてゐたが
その朝を自分はわすれない
その日は朝から空もからりと晴れ
匙まで銀色にあたらしく
その匙ですくはれる小さい脂肪の粒粒は生き
てきらきら光つてゐた
それを啜るのである
それを啜らうと瀬戸皿に手をかけて
痩れてゐる妻をみあげた

其處に妻は自分を見まもつてゐた
目と目とが何か語つた
そして傍にさみしさうに座つてゐる子どもの
上に
言ひあはせたやうな視線を落した
其の時である
自分は曾て自分の經驗したことのない
大きな強いなにかの此身に泌みわたるのを感
じた
終日、地上の萬物を温めてゐた太陽が山のかな

たにはいつて
空が夕焼で赤くなると
妻はまた祈願でもこめに行くやうなうしろす
がたをして街にでかけた
食卓にはさうして朝毎にスープが上つた
自分は日に日に伸びるともなく伸びるやうな
草木の健康を
妻と子どもと朝朝のスープの愛によつて取り
返した
長い冬の日もすぎさつて

家の内はふたたび青青とした野のやうに明る
く
子どもは雲雀のやうに囀りはじめた

III

或る時

よろこびはまづ葱や菜つばの搖れるところから
らはじまつて
これから……

其處に何がある

足もとの地面をみつめてかんがえてばかりゐる
　る人間の腰ははやく彎曲(まが)る
いたづらに嘆き悲しんではならない
兄弟よ
あたまの上には何があるか
樹木のやうに眞直(まつすぐ)立て

そして垂れた頭をふりあげて高く見上げろ
其處に何がある
この大きな青空はどうだ
人間はこの青空をわすれてゐるのだ
兄弟よ
この大きな青空はどうだ

憂鬱な大起重機の詩

ぐつと空中に突きだした
腕だと思へ
いま大起重機は動いた
重い大きなまつ黑いものをひつ掴んで
それを輕輕と地面から空中へひき上げた
微風すらない

此の靜謐をなんと言はうか
怖しいやうな日和だ
蟻のやうに小さく
大きな重いものの取去られたところに群がつ
て
うようよ蠢動いてゐる人人
大起重機のたしかな力をみろ
その大浪のやうな運動を
その大きな沈默を
ああ大起重機の憂鬱！

ああ大起重機の怪物！
此の不可思議な怪力に信頼しろ
それの動いて行く方向をみつめて大空を仰い
でゐる人人
それを据附けたのは何ものだ
それをこしらへたのはどの手だ
それを考へれば
ああこれは人間以上の人間業だとすぐ解るこ
とだ！
人間は自然を征服した！

今こそ人間は一切の上に立つべきだ
太陽も眩暈(めくる)めくか
ああ人間は自然を征服したか
ああ
けれど人間は悲しい
此の大起重機にその怪力を認めた瞬間から
まつたく憐れな奴隷となつた
そして蟻のやうに小さくなつた
それがどうした
それがどうした

かんかん日の照る地球の一てんに跪坐(ひざまづ)いて此
の大怪物を禮拜しろ
ああ此の憂鬱な大機重機の壯麗！
ああ此の憂鬱な大起重機の無言！

耳をもつ者に聞かせる詩

これが神の意志だ
この力の觸れるところ
すべては碎け
すべて微塵となる
高高とどんな物でもさしあげ、ふりあげる此の
腕

そこに此の世界を破壞する憂鬱な力がこもつ
てゐるのだ
娘つ子はこんな腕でだき緊められろ
人形のやうな目のぱつちりしたあかんぼに
むくむくと膨くれた乳房が吸はせてみたくは
ないか
それも神の意志だ
これも神の意志だ
言へ
自分達こそ男と女の神樣なんだと

人間に與へる詩

そこに太い根がある
これをわすれてゐるからいけないのだ
腕のやうな枝をひつ裂き
葉つぱをふきちらし
頑丈な樹幹をへし曲げるやうな大風の時でも
ら

まつ暗な地べたの下で
ぐつと踏張つてゐる根があると思へば何でも
ないのだ
それでいいのだ
そこに此の壯麗がある
樹木をみろ
大木をみろ
このどつしりとしたところはどうだ

わすれられてゐるものについて

君達はひつ提げてゐる
各自に槓杆よりも立派な腕を
石つころをも碎く拳を
これはまたどうしたものだ
それで人間をとり返えさうとはしないのか
全くそれを忘れてゐる

そして馬鹿だと罵られてゐる
鐵のやうな腕と拳と
金錢で賣買のできない武器とは此のことだ
それは他人には何の役にも立たない各自のもの
で
君達に最初さういふ唯一の尊い武器をくだす
つたのは神樣だが
それをまるで薪木にもならないものだと嘲つ
て棄てさせやうとした惡漢は誰だ
だが考えてみれば

馬鹿だと言はれる君達よりも
君達を馬鹿だといふ奴等の方がよつぽど馬鹿
なんだ
いまに君達がひつ提げながらも忘れてゐるそ
の腕と拳とをおもひだす時
其時、一人が千人萬人になるんだ
其時、彼奴等は地べたにへたばるんだ
まあいいさ
何もかも神様がごぞんじでいらつしやるとだ
そうして其時、世界が息を吹返すんだ

寢てゐる人間について

みろ
何といふ立派な骨格だ
そしてこの肉づきは
かうしてすつぱだかで
ごろりとねてゐるところはまるで山だ
すやすやと呼吸するので

からだは山のうねりを打つ
ようくお寝(ねむ)み
ようくおやすみ
ゆふべの泥酔(ぬひ)がすつかりさめて
ぱつちりと鯨のやうな目があいたら
かんかん日の照るこの大地を
しつかり
しつかり
ふみしめて
またはたらくのだ

ようくおやすみ
おお寝てゐる人間のもつてゐる此の偉大
おおびくともしない此の偉大
それをみてゐると
自(おのづ)らあたまが垂れる

子どもは泣く

子どもはさかんに泣く
よくなくものだ
これが自然の言葉であるのか
何でもかでも泣くのである
泣け泣け
たんとなけ

もつとなけ
なけなくなるまで泣け
そして泣くだけないてしまふと
からりと晴れた蒼天のやうに
もうにこにこしてゐる子ども
何といふ可愛らしさだ
それがいい
かうしてだんだん大きくなれ
かうしてだんだん大きくなつて
そしてこんどはあべこべに

泣く親達をなだめるのだ
ああ私には眞實に子どものやうに泣けなくな
つた
ああ子どもはいい
泣けば泣くほどかはゆくなる

IV

人間の午後

まだそこで
わめきうめいてゐるのか
ヴアヰオリン
何といふ重苦しい日だ
黑黑と吐かれる煤烟
大きなけむだしの彼方に太陽はおちて行く

此の憂鬱のどん底で
うごめいてゐる生きものに幸あれ
祈禱の一ばんはじめの言葉
主よ、人間のくるしみはひまはりよりもうつくしい

雨の詩

ひろい街なかをとつとつと
なにものかに追ひかけられてでもゐるやうに
駆けてゆくひとりの男
それをみてひとびとはみんなわらつた
そんなことには目もくれないで
その男はもう遠くの街角を曲つてみえなくな

つた
すると間もなく
大粒の雨がぽつぽつ落ちてきた
いましがたわらつてゐたひとびとは空をみあ
げて
あわてふためき
或るものは店をかたづけ
或るものは馬を叱り
或るものは尻をまくつて逃げだした
みるみる雨は横ざまに

煙筒も屋根も道路もびつしよりとぬれてしま
つた
そしてひとしきり
街がひつそりしづかになると
雨はからりとあがつて
さつぱりした青空にはめづらしい燕が飛んで
ゐた

荷車の詩

日向に一臺の荷車がある
だれもゐない
ひつそりとしてゐる
木には木の實がまつ青である
荷車はぐつたりとつかれてゐるのだ
そしてどんよりした低氣壓を感じてゐるのだ

路上には濃い紫の木木の影
その重苦しい影をなげだした荷車

歡樂の詩

ひまはりはぐるぐるめぐる
火のやうにぐるぐるめぐる
自分の目も一しよになつてぐるぐるめぐる
自分の目がぐるぐるめぐれば
いよいよはげしく
ひまはりはぐるぐるめぐる

ひまはりがぐるぐるめぐれば
自分の目はまつたく葦み
此の全世界がぐるぐるとめぐりはじめる
ああ！

海の詩

どんよりとした海の感情
砂山にひきあげられた船船
波間でひどく搖られてゐるのもある
はるか遠方の沖から
こちらをさしてむくむくともりあがり
押しよせてくる海の感情

何處からくるか
この憂鬱な波のうねりは
そこのしれないふかさをもつて
此の大きな力はよ
ああ海は生きてゐる！
夜晝絶えず
渚にくだける此の波波のすばらしさ
そこにすむ漁夫等を思へ

ザボンの詩

おそろしい嵐の日だ
けれど卓上はしづかである
ザボンが二つ
あひよりそふてゐるそのむつまじさ
何もかたらず
何もかたらないが

それでよいのだ
嵐がひどくなればなるほど
いよいよしづかになるザボン
たがひに光澤を放つザボン

此處で人間は大きくなるのだ

とつとつと脈うつ大地
その上で農夫はなにかかんがへる
此の脈搏をその鍬尖に感じてゐるか
雨あがり
しつとりとしめつた大地の感觸
あまりに大きな此の幸福

どつしりとからだも太れ
見ろ
なんといふ豊富さだ
此の青青とした穀物畑
このふつくりとした畝畝
このひろびろとしたところで人間は大きくな
るのだ
おお脈うち脈うつ大地の健康
大槌で打つやうな美である

郊外にて

赭土の瘠せた山ぎはの畑地で
みすぼらしい麥ぼが風に搖られてゐた
わたしはすこし飢えてゐる
わたしは何かをもとめてゐる
麥ぼの上をとほつてどこへ行くのか
そよ風よ

みどり濃く色づいた風よ
都會の空をみろ
烟筒の林のしたの街街を
つばめはそのなかをとんでゐる
人人もそこに棲むのをよろこんでゐる
ここにゐてきこえる
あの空に反響する都會の騷擾
そこはまるで海のやうだ
風はそよそよと
麥穂に何をささやくのか

麥ぼは首をふつてゐる
それがさみしい

波だてる麥畑の詩

わたしらを圍繞(とりまき)くひろびろとした此の麥畑から
この黄金色した畝畝の間から
私はかうして土だらけの手を君達のかたへ
さし伸べる
君達は都會の大煙筒のしたで

終日じつと何をかんがへてゐるのだ
それが此の目にみえるやうだ
ああ大東京の銀座街
そこでもそよ風は華奢にひらひら翻つてゐるこ
とか
そのそよ風のもつてゆく生生しい穀物のにほ
ひで
街の店店はみたされたか
すこやかであれ
すこやかであれ

都會は君達のうへにのしかかり
そして君達はくるしんでゐる
それは君達ばかりではない
それだからとてどうなるものか
しつかりしろ
ああ此の波だてる麥畑
わたしらをおもへ
わたしらはこの麥ばたけで
君達のうしろに立つてゐるのだ
君達の前額(ひたひ)をふいてゐるそよ風は私等がここ

からおくつてゐるのだ
ああ此の豊饒な麥畑に
ああ此處にあるひばりの巣
その巣に小さな卵がある
私はこの事を君達に――全世界につげなげれ
ばならない

刈りこられる麥麥の詩

ああ何といふ美しさだ
此のうつくしさは生きてゐる！
みろ
麥畠はすつかりいろづき
ところどころの馬鈴薯と
蠶豆と葱と菜つぱと

大きな大きなみはてのつかない此のうつくし
さ
一めん黄金いろに麥は熟れ
刈りとられるのをまつてゐるやうな此のしづ
かさ
あちらこちらではじまつた麥刈り
あちらこちらから冴えざえときこえる鎌の刄
の音
水の逝るやうな此の音のするどさ
わたしの心は遠いところで獻秋をやめない

彼女は何をしてゐることか
わたしは彼女のことを思つてゐる
その上に此のひろびろとした畑地の美しさを
堆積ねるのだ
片つ端から刈りとられる麥麥
冴えざえと鋭くきこえる鎌の刄の音
麥もわたしとその音をきいてゐるのか
ゆたかに實のり
ぐつたりと重い穗首を垂れた麥麥

都會にての詩

都會はまるで海のやうだ
大波のよせてはかへす
此の海のやうな煤煙のそこで渦く
千萬の人間の聲聲
よせてはかへす聲の大波
大きな一つの聲となり

うねりくねり
のたうちながらも人間であれ
ああ海のやうな都會よ
その街街家家の軒かげにて
飢えながら雀でさへ生き
そこで卵をあたためかえしてゐるのだ
強くあれ
強くあれ
人間であることを信じろ
それを確く

大鉞

てうてうときをうてば
まさかりはきのみきをかむ
ふりあげるおほまさかりのおもみ
うでにつたはるこのおもみ
きはふるえる
やまふかくねをはるぶなのたいぼくをめが

けて
うちおろすおほまさかり
にんげんのちからのこもつたまさかり
ああこのきれあぢ
このきのにほひのなまなましさ
ひつそりとみみをすましたやうなやまおく
やまやまにはんきやうして
てうてうときのみきにくひいるまさかり
おほまさかりはたましひをもつ

一本のゴールデン・バット

一本の煙草はわたしをなぐさめる
一本のゴールデン・バットはわたしを都會の街
路につれだす
煙草は指のさきから
ほそぼそひとすぢ青空色のけむりを立てる
それがわたしを幸福にする

そしてわたしをあたらしく
光澤やかな日光にあててくれる
けふもけふとて火をつけた一本のゴールデン。
バットは
騷がしいいろいろのことから遠のいて
そのいろいろのことのなかにゐながら
それをはるかにながめさせる
ああ此の足の輕さよ

記憶について

ぽんぽんとつめでひき
さてゆみをとつたが
いつしか調子はくるつてゐる
ほこりだらけのヴアヰオリン
それでもちよいと
草の葉つぱのどこかのかげで啼いてゐる

あの蟋蟀(こおろぎ)の聲をまねてみた

収獲の時

黄金色に熟れた麥麥
黄金色のビールにでも醉ふやうに
そのゆたかな匂ひに醉へ
若い農夫よ
此處はひろびろとした畠の中だ
娘つ子にでもするやうに

かまふものか
穀物の束をしつかり抱きしめてかつぎだせ
山のかなたに夕立雲はかくれてゐる
このまに
このまに
いま
そして君達の收穫のよろこびを知れ
刈り干された穀物を愛せよ

V

くだもの

まつ赤なくだもの
木の上のくだもの
それをみたばかりで
人間は寂しい盗賊となるのだ
此の手がおそろしい

キリストに與へる詩

キリストよ
こんなことはあえてめづらしくもないのだが
けふも年若な婦人がわたしのところに來た
そしてどうしたら
聖書の中にかいてあるあの罪深い女のやうに
泥まみれなおん足をなみだで洗つて

黒い房房したこの髪の毛で
それを拭いてあげるやうなことができるかと
たづねるのだ
わたしはちよつとこまつたが
斯う言つた
一人がくるしめばそれでいいのだ
それでみんな救はれるんだと
婦人はわたしの此の言葉によろこばされてい
そいそと歸つた
婦人は大きなお腹をしてゐた

それで獨り身だといつてゐた
キリストよ
それでよかつたか
何だかおそろしいやうな氣がしてならない

或る淫賣婦におくる詩

女よ
おんみは此の世のはてに立つてゐる
おんみの道はつきてゐる
おんみはそれをしつてゐる
いまこそおんみはその美しかつた肉體を大地
にかへす時だ

靜かにその目をとぢて一切を忘れねばならぬ
おんみはいま何を考えてゐるか
おんみの無智の尊とさよ
おんみのくるしみ
それが世界の苦みであると知れ
ああそのくるしみによつて人間は救される
おんみは人間を救つた
おんみもそれですくはれた
どんなことでもおんみをおもへばなんでもな
くなる

おんみが夜夜うす暗い街角に餓えつかれて小
猫のやうにたたずんでゐた時
それをみて石を投げつけたものは誰か
あの野獸のやうな人達をなぐさむるために
年頃のその芳醇な肉體を
ああ何の憎しみもなく人人のするがままにま
かせた
齒を喰ひしばつた刹那の淫樂
此の忍耐は立派である
何といふきよらかな靈魂をおんみはもつのか

おんみは彼等の罪によつて汚れない
彼等を憐め
その罪によつておんみを苦め
その罪によつておんみを滅ぼす
彼等はそれとも知らないのだ
彼等はおのが手を洗ふことすら知らないのだ
泥濘の中にて彼等のためにやさしくひらいた
花のおんみ
どんなことでもつぶさに見たおんみ
うつくしいことみにくいこと

おんみはすべてをしりつくした
おんみの仕事はもう何一つ殘つてゐない
晴晴とした心をおもち
自由であれ
寛大であれ
ひとしれずながしながしたなみだによつて
みよ神神しいまで澄んだその瞳
聖母摩利亞のやうな崇高(けだか)さ
おんみは光りかがやいてゐるやうだ
おんみの前では自分の頭はおのづから垂れる

ああ地獄のゆりよ
おんみの行爲は此の世をきよめた
おんみは人間の重荷をひとりで脊負ひ
人人のかはりをつとめた
それだのに捨てられたのだ
ああ正しい
いたましい地獄の白百合
猫よ
おんみはこれから何處へ行かうとするのか
おんみの道はつきてゐる

おんみの肉體は腐りはじめた
大地よ
自分はなんにも言はない
此の接吻を眞實のためにうけてくれ
ああ何でもしつてゐる大地
そして女よ
曾て彼等の讃美のまつただ中に立ちながら
ひとときのやすらかさもなかつた
おんみを蛆蟲はいま待つてゐるのだ
あらゆるものに永遠の生をあたへ

あらゆるものをきよむる大地
此の大地を信せよ
人間の罪の犧牲としておんみは死んでくださ
るか
自分はおんみを拜んでゐる
彼等はなんにもしらないのだ
わかりましたか
そして吾等の骨肉よ
いま一どこちらを向いて
おんみのあとにのこる世界をよくみておくれ

溺死者の妻におくる詩

おんみのかなしみは大きい
女よ
おんみは靈魂を奪ひ去られた人間
おんみの生は新しく今日からはじまる
その行末は海のやうだ
そしてさみしい影を引くおんみ

けふもけふとて人人はそれを見たと言ふ
何んにも知らずにすやすやとねむつたおかん
ぼ
そのあかんぼを脊負つて泣きながら
渚をあちらこちらと彷徨つてゐるおんみの殘
すその足あと
その足あとを洗ひけす波波
女よ
おんみは此の怖ろしい海をにくむか
にくんではならない

おんみは此のひろびろとした海を恨むか
うらんではならない
海でないならと呟くな
ああそれが海である悲しさに於て
静におもへ
海はただ轟轟と吼えてゐるばかりだ
波は岸を嚙みただ荒狂つてゐるばかりだ
海に悪意がどこにある
それは自然だ
けれど溺れる人間の小ささよ

人間の無力を知れ
溺れたものがどうなるか
いたづらになげきかなしむことをやめ
それよりは脊負ふその子を立派に育てること
だ
強く強く
海より強く
波より強く
その手の上に眠る海
その手の下に息を殺した暴風(あらし)と波と

此の壯大な幻想を
あかんぼの未來に描け
それをたのしみに生きろ
その子のちからが此の大海を統御する時
おんみはもはや惡ますず恨ますず
此の海をながめ
此の海の無私をみとめて
はじめて人間を知るであらう
人間を
そして此の海をかき抱いて愛するであらう

而もおんみはそれまでに
いくたび海に悲しくも語らねばならぬか
せめてその屍體なりと返してよと
ああ若くして賴るべなき寡婦よ

大きな腕の詩

どこにか大きな腕がある
自分はそれを感ずる
自分はそれが何處にあるか知らない
それに就ては何も知らない
而もこれは何といふ力強さか
その腕をおもへ

その腕をおもへば
どんな時でも何處からともなく此のみうちに
湧いてくる大きな力
ぐたぐたになつてゐた體軀もどつしりと
だがその腕をみやうとはするな
見やうとすれば忽ちに力は消へてなくなるの
だ
盲者のやうに信じてあれ
ああ生きのくるしみ
その激しさにひとしほ強くその腕を自分は感

ずる
幸薄しとて呟くな
どこかに大きな腕があるのだ
人間よ
此のみえない腕をまくらにやすらかに
抱かれて眠れ

先驅者の詩

此の道をゆけ
此のおそろしい嵐の道を
はしれ
大きな力をふかぶかと
彼方に感じ
彼方をめがけ

わき目もふらず
ふりかへらず
邪魔するものは家でも木でもけちらして
あらしのやうに
そのあとのことなど問ふな
勇敢であれ
それでいい

VI

秋ぐち

TO K. TÔYAMA.

さみしい妻子をひきつれて
遙遙とともは此地を去る
渡り鳥よりいちはやく
そして何處へ行かうとするのか
そのあしもとから曳くたよりない陰影
そのかげを風に搖らすな

秋ぐちのうみぎしに
錨はあかく錆びてゐる
みあげるやうな崖の上には桔梗や山百合がさ
いてゐる
紺青色の天(そら)よりわたしの手は冷い

友よ
おん身のまづしさは酷すぎる
而もおん身の落窪んだその目のおくに眞實は
汚れない

生(いのち)を知れ
友よ
人間は此の大きな自然のなかで銘銘に苦んで
ゐるのだ
しづかに行け

此の世界のはじめもこんなであつたか

うすむらさきのもやのはれゆく
海をみる
此のすきとほつた海の感覺
おお此の黎明
この世界のはじめもこんなであつたか
さざなみのうちよせるなぎさから

ひろびろとした海にむかつて
一人のとしよつた漁夫がその掌をあはせてゐる
渚につけた千鳥のあしあともはつきりと
けさ海は靜穩かである

ひとりごと

一日中のはげしい勞働によつて
ぐつたりとつかれた體軀
今朝みると
むくむくと肥え太り
それがなみなみと力を漲らしてゐる
そしてあふれるばかりになつてゐる

それは大きな水槽が綺麗な水を一ぱいたたえ
てゐるやうだ
たらたらと水槽には筧の水がしたたるのだが
おお此の肉體の力はよ
それは眠つてゐるまに何處から來たか
力はあふれる水のやうなものだ
肉體から充ちあふれさうな此の力
それをまたけふもけふとて彼方で頻りに待つ
てゐる
あの丘つづきの穀物畠

あの色づいて波立てる麥の畠をおもへ
此の新しい日のひかり
新しくあれ
ゆたかな力のよろこびに生きろ

新聞紙の詩

けふ此頃の新聞紙をみろ
此の血みどろの活字をみろ
目をみひらいて讀め
これが世界の現象(あり)(さま)である
これが今では人間の日日の生活となつたのだ
これが人類の生活であるか

これが人間の仕事であるか
ああ慘酷に巣くはれた人間種族
何といふ怖しい時代であらう
牙を鳴らして嚙合ふ
此の呪はれた人間をみろ
全世界を手にとるやうにみせる一枚の新聞紙
その隅から隅まで目をとほせ
活字の下をほじくつてみろ
その何處かに赭土の痕せた穀物畠はないか
注意せよ

そしてその畝畝の間にしのびかくれて
世界のことなどは何も知らず
よしんばこれが人類の終焉であればとて
貧しい農夫はわれと妻子のくふ穀物を作らね
ばならない
そこに殘つた原始の時代
そこから再び世界は息をふきかへすのだ
おお黄金色した穀物畠の幻想
此の黄金色した幻想に實のる希望よ

汽車の詩

信號機(シグナル)がかたりと下りた
そこへ重重しい地響をたてて
大旋風のやうに堂々と突進してきた汽車
みろ
並行し交叉してゐる幾條のれーるのなかへ
その中の一本の線をえらんで

飛びこんできた此の的確さ
そしてぴたりとぷらつとほーむで正しくとまつた
此立派さを何といはうか
此の勇敢は壓迫する
けれど道は遠い
瀉罐(ヒシン)をば水と石炭とでたつぷり滿たせ
而して語れ
子どもらの歡呼をうけてきたことを
それから女の首と手足をばらばらにしたこと

を
木も家もひつくりかへして見せたことを
子どもらの愛するものよ
此の力強さを自分も愛する

都會の詩

煤烟はうつくしい
その煤烟で一ぱいになつた世界だ
その中にある此の大都會
働く者のかほをみろ
その手足をみろ
何といふ崇高(けだか)いことだ

ああ煤烟
その中でうめく勞働者の群
ふしぎなこともあればあるものだ
これが新鮮で
而も立派にみえるのだ
なにもかも慘酷のすることだ
ああたまらない
ひきつけられる

都會の詩

けむりの渦巻く
薄暮の都會
ぽつと花のやうに點じ
蔓のやうな燈線のいたるところで
黄金色に匂ふ燭光のうつくしさよ
黄金色に匂ふ千萬の燭光

みろ
都會はまるで畫のやうだ
だいあもんどがなんだ
るびいがなんだ
此の壯麗な都會の街街家家
ここに棲む人間なればこそどんな苦みをも耐
へるのだ
ここにすむ人間の幸福
ああ何もいらない
此の壯麗に匹敵するものは何か

此の幸福の上にあつて
都會は生きてゐる
よるのふけるにしたがつて
よるがふければふけるほど
だんだん都會は美しく光りかがやき
ここで疲れた人間が神神のやうに嚴かな眼瞼(まぶた)
を靜にとぢるのだ
此のうつくしさは生きてゐる

握手

どうしたといふのだ
そのみすぼらしいしほれやうは
そのげつそりと痩せたところはまるで根のな
い草のやうだ
おい兄弟
どうしたといふのだ

何はともあれ握手をもつてはじめることだ
さあその手をだしたまへ
しつかりと自分が握つてやる
大麥を刈りとつた畠に
これはいま秋そばを播きつけてきた手だ
どんなことでもしつてゐる手だ
どんなことにも耐えてきた手だ
土臭いとて顏を蹙めるな
此の手は君に確信を與へる
ぐつとつきだせ

もじもじするのは恥つべき行爲だ
君もその手に力をこめて
そして自分の痛いといふほど
握りかへしてくれ
それでよろしい
強く正しく直立て！

故郷にかへつた時

これではない
こんなものではない
自分が子どもでみた世界は
山山だつてこんなにみすぼらしく低くは
なかつた
何もかもうつくしかつた

太陽はいま蜀黍畑にはいつたところだ

一日の終りのその束の間をいろどつてゆつた
りと
太陽はいま蜀黍畑にはいつたところだ
大きなうねりを打つて
いくへにもかさなりあつた丘の畑と畑とのか
なたに

赤赤しい夕焼け空
枯草を山のやうに積んだ荷馬車がかたことと
その下をいくつもつづいてとぼつた
何といふやすらかさだ
此の大きいやすらかな世界に生きながら人間
は苦んでゐる
そして銘々にくるしんでゐる
それがうつくしいのだ
此のうつくしさだ
どこか深いところで啼いてゐるこほろぎ

自分を遠いとほいむかしの方へひつぱつてゆ
くその聲
けれど過ぎさつた日がどうなるものか
何もかも明日(あした)のことだ
何もかも明日のことだ

VII

自分はさみしく考えてゐる

ひとびとを喜ばすのは善いことである
自分をよろこばすのは更に善いことである
ひとびとをよろこばすことは
或は出來るかも知れぬ
自分をよろこばすことは大切であるが容易で
ない

物といふあらゆる物の正しさ
みなその位置を正しく占めてゐる秋の一日
すつきりと冴えた此の手よ
痩せほそつた指指よ
こんなことを自分はひとり考へてゐる
なんといふさみしい自分の陰影であらう

蝗

くるしみはうつくしい
人間の此の生きのくるしみ
これは人間ばかりでない
これが自然の深い大きな意志であるのか
深藍色にすつきりとした空

秋の日のうすらさみしさ
あちらこちらの畦畦にみすぼらしい彼等をみ
よ
女達と子ども等と
その手をのがれて逃げまどふ蝗蟲を
ひつそりと貧しい村村
ながながしい鶏の聲
田の面はひろびろと凪ぎ
蝗蟲がぴよんぴよん飛んでゐる
それをつかまへやうとしてあらそひ

それを追つ驅けまはしてゐる彼等
しきりにぴよんぴよんと
弱弱しい晝過ぎの光線を亂してとんでゐる
そしてまんまと捕へられる蝗蟲よ

愛の力

穀物に重い穂首をたれさせる愛のちからは大
きい
赤赤しい秋の日
ひろびろとした穀物畠
ひろびろと
としよつた農夫はそれに見惚れ

煙管の吸ひ殻をはたきながら
いたずらな雀や鴉に何をかたつてゐるのか
ゆたかに實のつた穀物は金の穂首をひくくた
れて
だまつてそれを聞いてゐる
穀物に重い穂首をたれさせる愛のちからは大
きい
黄銅のやうなその農夫のあたまの上に
蜻蛉が一ぴき光つてゐる
何といふ靜かさであらう

人間の神

手に大鍬をつつぱつて
ひろびろとした穀物畠の上をしみじみ眺めて
ゐる
としよつた農夫の顔よ
その顔の神神しさよ
農夫は世界のたましひである

農夫は人間の神である
黎明からのはげしい勞働によつて
崖壁のやうな胸をながれる脂汗
その胸にたたへた人間の愛によつて
穀物は重い穂首をひくく垂れた
みよ一日はまさに終らんとしてゐる
赤赤しい夕燒け空
大鍬の泥土をかきおとすのもわすれて
農夫はひろびろとした穀物畠を飽かずながめ
てゐる

その彼方にあかあかと
太陽は今やすらかにはいつて行くところだ

秋のよろこびの詩

青竹が納屋の天井の梁にしばりつけられると
大きな摺臼は力強い手によつてひとりでに廻
りはじめる
ごろごろと
その音はまるで海のやうだ
金の穀物は亂暴にもその摺臼に投げこまれて

そこでなかのいい若衆と娘つ子のひそひそば
なしを聞かせられてゐる
ごろごろと
その音はまるで海のやうだ
ごろごろごろごろ
何といふいい音だらう
あちらでもこちらでもこんな音がするやうに
なると
お月様はまんまるくなるんだ
そしてもうひもじがるものもなくなつた

ああ收穫のよろこびを
ごろごろごろごろ
世界のはてからはてまでつたへて
ごろごろごろごろ

草の葉つぱの詩

晩秋の黄金色のひかりを浴びて
野獸の脊の毛のやうに荒荒しく簇生してゐる
草の葉つぱ
一まいの草の葉つぱですら
人間などのもたない美しさをもつ
その草の葉つぱの上を

素足ではしつて行つたものがある
素足でその上をはしつて行つたものに
そよ風は何をささやいたか
こんなことにもおどろくほど
ああ人間の惱みは大きい
素足でその上をはしつて行つたものがあると
草の葉つぱが騷いでゐる

或る風景

みろ
大暴風の蹶ちらした世界を
此のさつばりした慘酷らしさを
骸骨のやうになつた木のてつぺんにとまつて
きりきり百舌鳥がさけんでゐる
けろりとした小春日和

けろりとはれた此の蒼空よ
此のひろびろとした蒼空をあふいで恥ぢろ
大暴風が汝等のあたまの上を過ぐる時
汝等は何をしてゐた
その大暴風が汝等に呼びさまさうとしたのは
何か
汝等はしらない
汝等の中にふかく睡つてゐるものを
そして汝等はおそれおののき兩手で耳をおさへてゐた

なんといふみぐるしさだ
人間であることをわすれてあつたか
人間であるからに恥ぢよと
けろりとはれ
あたらしく痛痛しいほどさつぱりとした蒼空
その下で汝等はもうあらじも何も打ちわすれ
て
ごろごろと地上に落ちて轉つてゐる果實(きのみ)
泥だらけの青い果實をひろつてゐる
おお此の蒼空！

雪ふり蟲

いちはやく
こどもはみつけた
とんでゐる雪ふり蟲を
而も私はまだ
一つのことを考えてゐる

冬近く

お前の目はふかい
それはまるで淵のやうだ
冬近く
その目の中にぽつぽつ……
ぽつぽつと點じた一つの灯を思へ
此の眞實に生きよ

いまは薄暮である
此のさびしさを愛せよ

蟋蟀

記憶せよ
あの夜のことを
あの暴風雨を
あの暴風雨にも鳴きやめず
ほそぼそと力強くも鳴いてゐた
蟋蟀は聲をあはせて

ほりがねのやうに鳴いてゐた
自分はそれを聞いてゐた

或る日の詩

草の葉つぱがゆれてゐる
その葉がかすかになびいてゐる
あらしが何處かを
いまとほる
いまとほるのか
ひつそりとした此のしづかさ

蜻蛉、蜻蛉
此の指さきにきてとまれ

或る日の詩

ひとりは寂しい
群衆の中はさらに寂しい
自分ばかりか
否
おお寂しい人間よ
かくも生(いのち)はさびしいものか

此の眞實に生きよと
木の葉はちる
はらはらとちる
秋の黄昏
みよ、いま世界は黄金色に夕焼けして
此の一日を終るところだ
はらはらとちる木の葉つぱ

記憶の樹木

樹木がすんなりと二本三本
どこでみたのか
その記憶が私を搖すつてゐる……
入日に浸つて黄色くなつた
最後の葉つば
その葉の落ちてくるのをそれとなく待つてゐた

それが自分達の上でひるがへり
冬の日は寂しく暗くなりかけた
風の日はいまも其の木木
骨のやうになつた梢の嗄れ聲

山

と或るカフエに飛びこんで
何はさて熱い珈琲を
一ぱい大急ぎ
女が銀のフォークをならべてゐる間も待ちか
ねて
餓えてゐた私は

指尖をソースに浸し
彼奴の肌のやうな寒水石の食卓に
雪のふる山を描いた
その山がわすれられない

道

道は自分の前にはない
それは自分のあしあとだ
これが世界の道だ
これが人間の道だ
この道を蜻蛉(とんぼ)もとほると言へ

初冬の詩

そろそろ都會がうつくしくなる
そして人間の目が險しくなる
初冬
いまにお前の手は熱く
まるで火のやうになるのだ

路上所見

大道なかをあばれてくる風
それに向つて張上げる子どもの聲
風はその聲をうばひさつたよ
けれど子どもはもうその風の鋭い爪もなにもわ
すれて
むかふの方を歩行いてゐる

友におくる

友よ
その足の腫物をいたはれ
その金の腫物を
うづきうづくいたみ
ながれる愛の膿汁

悪い風

街角で私は
悪い風に遭つた
どこかで見たやうな風だ
そうだ
いつか田圃で
子どもの紙鳶をうばつて逃げた

あの風の奴めだ

雪の詩

ちらちらと落ちてきた
雪の群集
どんよりとした空の彼方から
これが冬の飾りであるのか
此の世界への贈り物であるのか
純銀の街と村村と

此の凍えてゐる人人の上にふるか
雪は人間を意志的にする
雪は力を堆積する
そして人間を神神と一しよにする
祝福せよ
子ども等はうれしさに獅子のやうだ
ちらちらと落ちてくる雪
雪の殘忍な靈魂(たましひ)
このうつくしさを煩張り貪り
くるへ

VIII

雪もおどれ
雪のやうな子ども等

世界の黎明をみる者におくる詩

鶏の聲にめざめた君達だ
からすや雀より早くおきいで
そして畑へ飛びだした君達だ
朝露にびつしよりぬれた君達だ
まだ太陽も上らないのに
君達の額ははやくも汗ばんだ

君達はひろびろとした畑の上で
世界の黎明をみた
それをみるのは君達ばかりだ
此の世のはてからのぼつてくるその太陽を
どんなに君達はおどろかしたことか
君達はしるまい
君達はしるまい
此の若き農夫を思へ！

自分は此の黎明を感じてゐる

自分は感じてゐる
此の氷のやうな闇の底にて目もさえざえと
ふゆの黎明を
遠近でよびかはす鷄の聲聲
人間の新しい日をよびいだすその聲を
ぐ、ら、す、のやうに冴えかへる夜氣

枯れ殘つた草の葉つぱの上に痛痛しい雪のや
うな大霜
なにもかもはつきりとした世界の目ざめ
此の永遠の黎明を
自分はつよく感じてゐる
それをどんなにのぞんでゐるか
而も夜はながい
おもへ
朝日にかがやく冬の畑を
大地の中で肥えふとる葱や大根を

それから人類のことを

偉大なもの

偉大なものは砲彈ではない
槲の木のやうな腕である
それはまた金貨でもない
鋼鐵(はがね)の齒をもつ胃ぶくろである
その上に
此の意志だ

强者の詩

人間の此上もなきかなしみは
此のくるしみの世界に生みいだされたことだ
と云ふか
否！
これこそ人間のよろこびではないか
此のうつくしさが解らないのか

何といふうつくしさであらう
此のくるしみの世界は
此のくるしみに生くることは
みよ
ひろびろとした此の秋の田畠を
重い穂首をたれた穀物
いさましいその刈り手
その穀束をはこび行く馬
ゆたかな天日の光をあびつつ
其處にも此處にも

落穂をひらふ貧しい農婦等
からすや雀も一しよであるのか
此のむつましさを知れ
此のうつくしさはどうだ
此の大きなうつくしさはどうだ
此のうつくしさを知るものは強い
此のくるしみの世界にのみ
人間の生きのよろこびはある
人間の生きのよろこびよ
強きものにのみ此の世界はうつくしいのだ

かくして峻厳な一日ははじまり
かくして人間の一日は終る
強くあれ

病める者へ贈物としての詩

林檎より美しいもの
かすてらより柔いもの
此の愛をそなたにおくるのだ
此の愛を
雪のやうな此の愛
落葉のやうにはらはらと

そなたの上に靡へる
そなたはそれをどうみるか
風の中なる私の愛を……
何といふ冷い手だ
何といふさみしい目だ
おお病める者
そなたのためには純白な雪
そして火のやうな私だ
この愛の中で穀物の種子(たね)のやうな強き生(いのち)をと
りかへせ

光りを感じ
しづかに生き

或る日曜日の詩

雪を純白にいただいた遠方の山山をみつめて
ゐると
指指の尖から冴えてくるやうだ
ぎらぎら油ぎつて光る
椿や樫の葉つぱ

冷い風に枯草が鳴る
地に伏して鳴る
木木は骸骨のやうだ
その梢の嗄れた生きもののやうな聲聲

険悪な空はせわしさうだ
雲と雲との描く
田畠の上をはしる陰影
とろりとした日だまり

ひさしぶりで來てみる公園はすつかり荒れは
てた
げれど今日は善い日曜日だ
子ども等が何かしてあそんでゐる
落葉のやうな子ども等よ

とろりとした日だまり
その光はまるで蜂蜜のやうだ

朝の詩

しののめのお濠端に立ち
お濠に張りつめた
氷をみつめる此の氣持
此のすがすがしさよ
硝子のやうな手でひつつかんだ
石ころ一つ

その石ころに全身の力をこめて
なげつけた氷の上
石ころはきよろきよろと
小鳥のやうにさえずつてすべつた
（おお太陽！）
おお此の氣持で
人間の街へ飛びこまう
あの石ころのやうに

大風の詩

けふもけふとて
大風は朝からふいた
大風はわたしをふいた
その大風と一しよに
わたしはひねもす
畑で大根をぬいてゐた

農夫の詩

おいらをまつてる
あの山かげへ
けふもまたおいらは馬と田圃をすきに行くん
だ
あそこは酷い瘠地だけれど
どんなにおいらをまつてるか

すけばそれでも黒黒と
そこに冬ごもりをしてゐた蛙が巣をこわされ
てぴよんぴよん飛びだす
雀や鴉がどこからともなく群集する
おいらの馬は家中一ばんの働き手だ
おいらは馬と一しよであるのがどんなにすき
だか
おいらが馬のかはりをすれば
馬はおいらのことをする
かうしてたがひに生きてゆくんだ

おてんとうさま
ああ、けふといふけふの此の幸福
何といふ大きな蒼天(あを ぞら)でせう
そしておいらがうたひだすと
耳をぴんとつつ立てて
ばかに鼻息あらあらしく
犁をもつ手もあぶないほど
おいらの馬はすこし元氣になりすぎます

人間の詩

ぼくは人間が好きだ
人間であれ
それでいい
それだけでいい
いいではないか

ぼくは人間が好きだ
人間であれ
此の目
此の耳
此の口
此の鼻
此の手と足と
何といはうか此の立派さ
頭上(づじやう)に大きな蒼天をいただき

二本の脚で大地をふみしめ
樹木のやうにその上につつ立つ人間
牛のやうな歩行者
蜻蛉(とんぼ)のやうな空中の滑走者

此の人間をおもへ
此の世のはじめ
まだ創造のあしたであつた時を想像してみろ
そこに何があつたか
茫漠としてはてなき荒野

おなじやうな其上の空
その空の太陽
それをみつけたのは人間だ
みんな人間が發見けたのだ
みんな人間のものだ

翼あるもの
鰭あるもの
すべての匍ふもの
すべての草木

すべてのものを愛し
すべてのものに美き名をあたへた人間

一切の價値
一切の意義
一切の法則
一切は人間のさだめたところによつて存在するのだ
人間あつての世界でないか
人間を信せよ

此の偉大なる人間を
大地が地上に押しだした生の子ども

人間であれ
人間を信せよ
鐵のやうな人間の意志を
けだもののやうな人間の愛を
そして神神のやうな人間の自由を
ああ人間はいい

空氣と水と穀物と
それから日光と
そこで繁殖する人間だ
そこで人間は大きくなるのだ
そこで人間はつよくなるのだ
ああ人間はいい

此の人間は生きてゐる
此の人間は生きんとする
人間であれ

人間であることを思へ

人間はいい
ぼくは人間が好きだ
ぼくが一ばん好きなのは何とゆつても人間だ
人間であれ
人間であれ
人間であれ
人間であれ

此の人間はどこからきた
此の人間はどこへ行く
それがなんだ
そんなことはどうでもいい
よくみろ
而して思へ
どんな世界を新しく此の人間がつくりいだす
か
どんな時代を新しく此の人間がつくりいだす
か

どんな大きな信念を
どんな大きな思想を
どんな大きな藝術を
此の人間が生みいだすか

人間をみろ
人間をみろ
よくみろ
目をすえてみろ、太陽
永遠を一瞬間に生きる人間

汝の愛しむもの
神神も照覽あれ
此の生きてゐる人間を

姙婦を頌する詩

生みのくるしみ
此のくるしみのために
はらめるものよ
おんみはなにをかんずるか
おそろしい胎内のあらし

あらしを思へ
あらしを忍べ
はらめるものは人間である
永遠のはてから來るもの
太陽の愛(いつく)しむもの

生みのくるしみ
おんみのくるしみ
それが世界のよろこびだ
人間の一人が世界に殖えるところに

此のよろこび
此のよろこびを思へ

からりとはれた蒼空のやうな氣持で
やがておんみはみつけるのだ
あらしのわすれていつたものを
その膝の上に
その乳房を吸つてゐるのを
しばらくしのべ
あらしをしのべ

おんみは人間の創造者である
おんみらによつて人間は此の世界にきたる
萬物の讃美をうけよ
人間の母なるおんみ
人間をはらめるおんみ

生めよ
ふへよ
地にみてよ
勝利をあげて來れ、人間

妹におくる

枯葉の下からぞつくりと青い芽をだしてゐる
　みづくさ
すんなりとのびてゐる木木
ひらひらしてゐるのはその木木の嫩葉だ
あたりにさえづる鶯やのじこ
落窪からちろちろと雪解の水がながれてゐる

その水のきよらかさ
その水のきよらかさは
いもうとよ
それはそなたの愛のやうだ
ひとにかくしたくちつけにとけてながれるそ
なたの愛だ

十字架

十字架のおもさは齒をたて
むごたらしくも肉體に喰入る
苦しむものの愛する十字架
苦しむものよ
にんげんこそまことのキリスト
そして道はながい

ゴルゴダへの此の道
どこまで行つたらつきるのか
肩の上の十字架
よろめく足を踏みしめて進み行く
くるしみをじつと耐えてすすみ行く
みそなはせ
主よ、人間のこの強さを・・・・

鞴祭の詩

自分の意志はあかあかと
みよ、うつくしくやけただれてゐる
鐵砧の上なる意志を
鋼鐵のやうな此の意志を
打て！
鐵槌をふりかざせ

とびちるものは火花の吐息だ
とびちるものは自分の吐息だ
くるしい
くるしいから美しいのだ
生きのくるしみ
それが人間にこもつて力となるのか
世界の黎明よ
研ぎすました此の冴え
ふれれば切れるやうな空氣
鋼鐵のやうな自分の此の意志

それを鍛える自分の力
くるしめ
くるしめ
鐵砧の上できたへろ
とんかんと
此のいい音響で冬めを祭れ

鴉祭の詩

大鴉
藁とぼろとでこしらへた鴉
そのからすを祭れ

きみらは農夫
ひろい黎明の畠にとびだし

しみじみと種子を蒔いた
種子は一粒一粒
種子は善い種子
その上に土をかけ
太陽にそれをかくした
きみらは農夫
それからといふもの
どんなに畠のことばかりかんがへてゐたこと
か
そんなこととはしらないで

そんなことともしらないで
鴉めが來てはそれをほぢくる
そのからすを祭れ

貧者の詩

みよ、そのぼろを
此のうつくしい冬の飾りを
それから赤い鼻尖を
人間が意志的になると
霜はまつ白だ
指のちぎれさうな此の何ともいへないいみじ

さ
ふゆを愛せよ
そのぼろの其處此處から
肉體が世界をのぞいてゐる

單純な朝餐

スープと麵麭
そして僅かな野菜
何といふ單純な朝餐(あさけ)であらう
朝も朝
此の新しい一日のはじめ

スープのにほひ
ぱんのにほひ
その上に蒼天のにほひ
一家三人
何といふ美しい朝餐であらう

屋根から雀もをりて來よ
此の食卓はまづしいけれど
みろ
此の子どもを

此の小さな手にその匙をもつたところを
ひもじさをじつと耐えて
感謝のあたまを低く垂れ
わたしらのやうにたれ
わたしの祈りをしづかにまつてゐるではない
か

此の食卓に祝福あれ！

IX

そこの梢のてつぺんで一はの鶸がないてゐる

すつきりとした蒼天
その高いところ
そこの梢のてつぺんに一はの鶸(ひわ)がないてゐる
昨日(きのふ)まで
骨のやうにつつぱつて

ぴゆぴゆ風を切つてゐた
そこの梢のてつぺんで一はの鶏がないてゐる
それがゆふべの糠雨で
すつかり梢もつやつやと
今朝(けさ)はひかり
煙のやうに伸びひろがつた
そこの梢のてつぺんで一はの鶏がないてゐる
それがどうしたと言ふのか
そんなことをゆつてゐたのでは飯が食へぬと
ひとびとはせわしい

ひとびとのくるしみ
くるしみは地上一めん
けれど高いところはさすがにしづかだ
そこの梢のてつぺんで一はの鶏がないてゐる

雨は一粒一粒ものがたる

一日はとつぷりくれて
いまはよるである
晩餐(ゆふげ)ののちをながながと足を伸ばしてねころ
んでゐる
ながながと足を伸ばしてねころんでゐる自分
に

雨は一粒一粒ものがたる
人間のかなしいことを
生けるもののくるしみを
そして燕のきたことを
いつのまにかもうすやすやと眠つてゐる子と
も
妻はその子どものきものを縫ひながら
だんだん雨が強くなるので
播いた種子が土から飛びだしはすまいかと
うすぐらい電燈の下で

自分と一しよに心配してゐる

麥畑

此のみどり
ああ此のみどり
生命の色！
憂鬱なむぎばたけのうつくしさ
むぎばたけをみてゐると
自分にせまる人間の情慾

此の力のかたまり
人間の強い眞實
これこそ深いところから
浪浪のうねりをもつて湧き上つてくる力だ
そして生生しい土の愛により
どんなに大きな健康を麥ぐさはかんじてゐる
ことか
ああ此の麥ぐさの列
ああ、けふばかりは蒼天も自分にふさはしく
どこかで雲雀もないてゐる

ああ此のみどり
此の麥のみどりに手を浸して
自分はなみだぐんでゐる

朝

雨戸をがらり引きあけると
どつとそこへ躍りこんだのは日光だ
お！まぶしい
頭蓋(あたま)をがんと一つくらしつけられでもしたや
うに
それでわたしの目はくらみ

わたしはそこに直立した
おお
けれど私のきつぱりした朝の目覺めを
どんなに外でまつてゐたのか
此の激烈な日光は！
やがておづおづと痛い目をほそく漸くみひら
いて
わたしはみた
わたしはみた
そこに

すばらしい大きな日を
からりとはれた
すべてがちからにみちみちた
あたらしい一日のはじめを

人間苦

何方をむいてみても
ひどく人間はくるしんでゐる
ああ人間ばかりは
人間ばかりか
人間なればこそ自分もこんなにくるしんでゐ
るのだ

すばらしい都會の大通でも
此の汎いあをあをとした穀物畠ででも
みんな一緒だ
だれもかれもみんなくるしんでゐるのだ
けれどみんなのくるしみをみると
自分はいよいよくるしくなる
みんなといつしよにくるしむのだ
みんなといつしよにくるしむとは言へ
自分等はひとりびとりだ
ひとりを尊べ！

何と言つてもくるしむのだ
自分はひとりでくるしまう
みんなのかはりにくるしまう
一切のくるしみをみな此の肩にのせかけろ
人人よ
そして身も輕輕と自由であれ
空の鳥のやうであれ
萬人を一人で
自分はみんなの幸福のために生きやう
自分はみんなのくるしみに生きやう

かうおもつてみあげた大空
此の滴るやうな深い碧さ
此のすばらしさ
自分はかくも言ひ知れぬ鋭さにおいて感ずる
人間の激しい意志を
いまこそ強い大地の力を

わたしたちの小さな畑のこと

すこし強い雨でもふりだすと
雀らにかくしてかけた土の下から
種子はすぐにもとびだしさうであつた
私達はそれをどんなに心配したか
そしてその種子をどんなに愛してゐたことか
それがいつのまにやら

地面の中でしつかりと根をはり
青空をめがけて可愛いい芽をふき
こうして庭の隅つこの小さな畑ででも
其の芽がだんだん莖となり葉となりました
それらの中の或るものなどは
たちまちながくするすると
人間ならば手のやうな蔓さへ伸ばしはじめた
それではじめて隱元豆だとしれました
昨日夕方楷木をそれに立ててやつたら
今朝はもう、さもうれしさうにどれにもこれに

もからみついてゐるではありませんか
此の外に、蜀黍と胡瓜と
數種の秋のはなぐさがあります
どれもこれも此の小さな畑のなかで滿足しき
つてそだつてゐます
そしてそれらの上に太陽は光をかけ
太陽のひかりは小さな畑から
あたり一めんにあふれてをります

一日のはじめに於て

みろ
太陽はいま世界のはてから上るところだ
此の朝霧の街と家家
此の朝あけの鋭い光線
まづ木木の梢のてつぺんからして
新鮮な意識をあたへる

みづみづしい空よ
からすがなき
すずめがなき
ひとびとはかつきりと目ざめ
おきいで
そして言ふ
お早う
お早うと
よろこびと力に満ちてはつきりと
おお此の言葉は生きてゐる！

何といふ美しいことばであらう
此の言葉の中に人間の純さはいまも殘つてゐる
此の言葉より人間の一日はじまる

自分達の仕事

自分達の仕事
それは一つの巣をつくるやうなものだ
此の空中にたかく
どんな强風にも落ちないやうな巣をつくれ
そして大地にふかぶかと根ざした木木
その木の梢のてつぺんで

卵を孵へさうとしてゐる鳥は
いまああしてせわしく働いてゐる
毎日毎日
朝から夕まで
あちらの都會の街上で女の髪毛を拾つたり
こちらの村の百姓の藁を一本盗んだり
ああ自分達もあの鳥とおなじだ
けれど鳥にはあのやうな翼がある
自分達には何があるか
ああ

消息

はつなつの木木の梢をわたる風だ
穀物畠の畝からぬけでてきた風だ
わたしらの屋根の上を
それはまるで遠くできく海の音のやうだ
その下にわたしらはすんでゐる
魚類のやうにむつまじくくらしてゐる

風はしめやかだ
たかいあの青空をわたる風だから
時時すういと突刺すやうにつばめなんどを飛
ばせてよこす
そしてわたしらをびつくりさせる
わたしらはむつまじくくらしてゐる
わたしらは貧しく而もむつまじくくらして
ゐる
わたしらは魚類のやうにくらしてゐる

感謝

なんといふはやいことだ
たつたいまおきたばかりのところへ
ステーションから箱が一つ
どつさりととどいた
その箱は遠くからいくつもいくつも隧道(とんねる)をく
ぐつてきたのだ

黄金色した大きな穀物畠を横斷し
威勢のいい急行列車に載せられてきたのだ
そして此の都會のわたしらまできたのだ
みると箱の裂目からなにかでてゐる
それは葱の新芽だ
それから馬鈴薯と鞘豆と
紫蘇の葉の匂もそこら一ぱいに朝のよろこび
を漂はせてゐる

勞働者の詩

ひさしぶりで雨がやんだ
雨あがりの空地にでて木を鋸きながらうたひ
だした
わかい木挽はいい聲を張りあげてほれぼれと
うたひだした
何といふいい聲なんだ

あたり一めんにひつそりと
その聲に何もかもききほれてゐるやうだ
その聲からだんだん世界は明るくなるやうだ
みゝろ、そのま上に
起つたところの青空を
草木（くさき）の葉つぱにぴかぴか光る朝露を
一切のものを愛せよ
どんなものでもうつくしい
わかい木挽はいよいよ聲をはりあげて
そのいいこゑで

太陽を萬物の上へよびいだした

老漁夫の詩

人間をみた
それを自分は此のとしよつた一人の漁夫にみた
漁夫は渚につつ立つてゐる
漁夫は海を愛してゐる
そして此のとしになるまで

どんなに海をながめたか
漁夫は海を愛してゐる
いまも此の生きてゐる海を・・・
じつと目を据え
海をながめてつつ立つた一人の漁夫
此のたくましさはよ
海一ぱいか
海いつぱい

否、海よりも大きい
なんといふすばらしさであらう
此のすばらしさを人間にみる
おお海よ
自分はほんとの人間をみた

此の鐵のやうな骨節をみろ
此の赤銅のやうな胴體をみろ
額の下でひかる目をみろ
ああ此の憂鬱な額

深くふかく喰ひこんだその太い力強い皺線を
よくみろ

自分はほんとの人間をみた

此の漁夫のすべては語る
曾て沖合でみた山のやうな鯨を
たけり狂つた斷崖のやうな波波を
それからおもはず跪いたほど
うつくしく且つ嚴かであつた黎明の太陽を

ああ此のあをあをとしてみはてのつかない大
青海原
大海原も此の漁夫の前には小さい
波はよせて來て
そこにくだけて
漁夫のその足もとを洗つてゐる

驟雨の詩

何だらう
あれは
さあさあと
竹やぶのあの音
雨だ
雨だ

おやもうやつてきた
ぽつぽつと大粒で
ああいい
ひさしぶりで
びつしよりぬれる草木だ
びつしよりぬれろ

苦悩者

何をしてきた
何をしてきたかと自分を責める
自分を嘲ける此の自分
そして誰も知らないとおもふのか
自分はみんな知つてゐる
すつかりわかりきつてゐる

わたしをご覽
ああおそろしい

いけない
いけない
私に觸つてはいけない
私はけがれてゐる
私はいま地獄から飛びだしてきたばかりだ
にほひがするかい
お白粉や香水の匂ひが

あの暗闇で泳ぐほどあびた酒の匂ひが
此の罪惡の激しい樣樣なにほひが
おお腸(はらわた)から吐きだされてくる罪惡の匂ひ
それが私の咽喉(のど)を締める
それが私のくちびるに附着(くつつ)いてゐる
それから此のハンカチーフにちらついてゐる

自分はまだ生きてゐる
まだくたばつてはしまはなかつた
自分はへとへとに疲れてゐる

ゆるしておくれ
ゆるしてくれるか
神も世界もあつたものか
靈魂(たましひ)もかねもほまれもあつたものか
此の疲れやうは
まるでとろけてでもしまひさうだ
とろけてしまへ

何だその物凄いほど蒼白い顔は
だが實際、うつくしい目だ

此の頸にながながと蛇のやうにからみついた
その腕は
ああゆるしておくれ
そして何にも言はずに寝かしておくれ
私はへとへとにつかれてゐる

なんにもきいてくれるな
こんやは
あしたの朝までは
そつと豚のやうに寝かしておいておくれ

とは言へあの泥水はうまかつた
それに自分は酔つぱらつてゐるんだ
此の言葉は正しい
此のていたらくで知るがいい

而も自分は猶、生きやうとしてゐる
自分の顔へ自分の唾のはきかけられぬ此のく
やしさ
ああおそろしい
ああ睡い

そつと此のまま寝かしておくれ
だがこんなことが一體、世界にあり得るものか
自分は自分を疑ふのだ
自分は自分をさわつてみた
そして抓つて撲つてかぢつてみた
確に自分だ
ああおそろしい

自分は事實を否定しない

事實は事實だ
けれどもう一切は過去になつた
足もとからするすると
そしてもはや自分との間には距離がある
そしてそれはだんだん遠のきつつ
いまは一種の幻影だ
記憶よ、そんなものには網打つな

おお大罪惡の幻影！
罪惡はうつくしい

あの大罪惡も吸ひついた蛭のやうにして犯し
たんだ
けれどその行爲につながる粘粘した醜い感覺
それでもあのまつ暗なぬるぬるしてゐる深い
穴から
でてきた時にはほつとした
そして危く此の口からすべらすところであつ
た
この涎と甘いくちつけにけがれた唇から
おお神よと

そして私は身震ひした
それはさて、こんやの時計ののろのろしさはど
うだ
迅速に推移しろ
ああ睡い睡い
遠方で一ばん鶏がないてゐる
もう目がみえない
黎明は何處までちかづいて來てゐるか
このままぐつすり寝て起きると
そこに新しい人間がある

ゆふべのことなどわすれてしまつて
はつきりと目ざめ
おきいで
大空でもさしあげるやうな脊伸び
全身につたはる力よ
新しい人間の自分
それがほんとの自分なんだ
此の泥酔と懊惱と疲労とから
そこから生れでる新しい人間をおもへ！
彼が其時吸ひこむ新鮮な空氣

彼が其時浴びる朝の豊富にして健康な世界一
ぱいの日光

どこかで鶏が鳴いてゐる
ああ睡い
ぶつ倒されるほど睡い
自分はへとへとにつかれてゐる
ねかしておくれ
ねかしておくれ

そして自分の此の手を
指をそろへて此の胸の上で組ましておくれ
しかし私に觸つてはいけない
私はひどくけがれてゐる
たつた一とこと言つてくれればいい
誰でもいい
全人類にかはつて言つておくれ
何にも思はず目を閉ぢよと
それでいい
それでいい

ああ睡い
これでぐつすり朝まで寢られる

朝あけ

朝だ
朝霧の中の畑だ
蜀黍(とうもろこし)とかぼちや、豆、芋
――そして
わたしは神を信ずる――
まだ誰も通らないのか

此の畑なかの徑(こみち)を
わたしの顔にひつかかり
ひつかかる蜘蛛の巣
その巣をうつくしく飾る朝露
此のさわやかさはどうだ

——いまこそ
わたしは神を信ずる

X

生みのくるしみの頌榮

くるしいか
くるしからう
いまこそ
どんなに此のくるしみがしのべるか
おんみは人間の聖母
じつとこらえろ

人間の強さを見せて！

くるしいか
くるしめ
此のくるしみの間より出で來るもの
否、此のくるしみの間にあつて
此の人間のくるしみより生みだせ
新しき世界へ
雄々しきものを
小獅子を

おんみは生死の間にある
おんみを凝視める自分をみろ
くるしいか
おおそのくるしみ
此のくるしみ
自分もおんみと一しよだ

ああ偉大なる人間の創造
ああ偉大なる人間の誕生

あかんぼ

暴風(らし)はさつた
あらし
あらし
あばれくるつて過ぎさつた
そしてそのあとに可愛いいあかんぼを殘して
わすれていつたのか

あかんぼはすやすやと寢床(ねどこ)の上
そのそばにぐつたりとつかれてその母もねて
ゐる
何といふ麗かな朝だろう
わたしは愛する

風景

何がなくてもいい
これだけでいい
ポプラ一本
くつきりとたかくたかく
天をめがけてつつ立つたポプラ
大風の日のポプラ

ほえろ
ほえろ
なんといふ力強さを人間にみせてゐることか
ああ空高く
まるできちがひの自分だ

疾風の詩

あらゆるものをけちらし
あらゆるものに吼えかかる疾風
街上をまつしぐらに
疾風はまるで密集せる狼のやうだ
そしてあばれてきて郵便局のぐらすの大扉に
つきあたり

けれどすばやく
くるりとひきかへし
右に折れ
停車場の方をめがけて走つて行つた
そのあとの街上さびしく
もめくちやにされた自分はそこで紙屑のやう
にひるがへりつつ
疾風のゆくへをじつとながめてゐた
この疾風はどうだ
それだのに人間の自分は

おお紙屑のやうにひるがへりつつ

友におくる詩

何も言ふことはありません
よく生きなさい
つよく
つよく
そして働くことです
石工(いしや)が石を割るやうに

左官が壁をぬるやうに
それでいい
手や足をうごかしなさい
しつかりと働きなさい
それが人間の美しさです
仕事はあなたにあなたの欲する一切(すべて)のものを與
へませう

自分はいまこそ言はう

なんであんなにいそぐのだらう
どこまでゆかうとするのだらう
どこで此の道がつきるのだらう
此の生の一本みちがどこかでつきたら
人間はそこでどうなるだらう
おお此の道はどこまでも人間とともにつきな

いのではないか
谿間をながれる泉のやうに
自分はいまこそ言はう
人生はのろさにあれ
のろのろと蝸牛のやうであれ
そしてやすまず
一生に二どと通らぬみちなのだからつつしん
で
自分は行かうと思ふと

歩行

天上で
まづ太陽がそれをみてゐる
草木がみてゐる
蝶蝶やとんぼがみてゐる
わんわんがみてゐる
あかんぼがよたよたと歩いてゐるのを

ここは路側(みち はた)である
そのあかんぼからすこしへだたつて
手を拍つてよんでゐるのは母である
かうしてあゆみをおしへてゐる
かうしてあかんぼはだんだんと大きくなり
そして強くなり
やがてひとりで人間の苦しい道をもゆくやう
になるのだ
おおよたよたと
赤い小さな靴をはき

あんよする
あんよする
お友達がみんなみてゐるのだから
ころんではいけません
此の可愛らしさ
みよ
而も大地を確りとふみしめて

家族

わたしの家は庭一ぱいの雑草だ
わたしは雑草を愛してゐる
まるで草つぱらにあるやうなわたしの家にも
冬が來た
鋼鐵のやうな日射の中で
いのちの短いこほろぎがせわしさうにないて

ゐた
わたしらはそのこほろぎと一しよに生きてゐるのだ

日一日と大氣は水のやうに澄んでくる
いまはよるもよなかだが
こほろぎはしきりにないてゐる
わたしは寢床の上ではつきりと目ざめた
子どもをみると
子どもはしつかりその母に獅嚙みついてゐる

ではないか
そしてぐつすりねこんでゐる
おお、妻よ
お前もそこでねむれないのか
しんしんと泌み徹るこの冷氣はどうだ
もつとおより
一ツ塊(かたまり)になるまで

薄暮の祈り

此のすわり
此の靜かさよ
而もどつしりとした重みをもつて林檎はまつ
かだ
まつかなりんご
りんごをじつとみてゐると

ほんとに呼吸をしてゐるやうだ
ねむれ
ねむれ
やせおとろへてはゐるけれど
此の掌の上でよくねむれ
此のおもみ
此の力のかたまり
うつくしいのは愛だ
そして力だ
林檎一つ

ひたすらに自分は祈る
ましてこのたそがれの大なる深さにあつて
しみじみとりんごは一つ
りんごのやうに自分達もあれ
此の眞實に生きやう

"Die Humanität erst bringt Klarheit
über die Menschenwelt, und von da aus
auch über die Götterwelt"

—H. cohen

山村君

君と僕とは如何なる不思議の機縁あつてか斯くも深いまじはりに在り、君のその新しい詩集の一隅にいまは僕の言葉がつらなることとなつてゐる。おそらく君は僕を一評論家と過して何事をか述べさせやうとするのではなからう。僕もまた文壇に立

つものの一人として君の詩集にむかはうとは思はない。君の生活は僕にとつてはあまりに嚴肅であり、君の詩は僕にとつてはあまりに尊貴であるが故に、僕は幾分でもかの評論家の態度に於て君に對することを恥ぢてゐる。而もかの唐土の一詩人がつねにその詩を街上の老嫗にもたらした雅量をもつて君が僕の言葉にきかれるならばそれは僕の幸福といふものだ。

君の詩について僕がなにごとかを言ふのはこれで三度目だと思ふ。はじめは「第三帝國」で「新文藝の理想を提唱す」の一ぺんを書き、僕の所謂神秘的象徴主義の哲理を提唱した時であつて其の中で僕はまづ僕の藝術理想を斯く主張した。

1　まづ人道主義者の主張に反して文藝からは一切の道德的倫理的の標準をとり去らなければならない。

2　個人的相對的經驗的の感覺と感情とはなれて超個人的絶對的形而上的の感覺と感情、言はば宇宙或は自然がもつ感覺感情ともいふべきものを表現しなければならない。これに對して前者の感覺と感情とをのみ表現してその奥に後者の感覺と感情とを暗示し得ない藝術をセンチメンタリズムの藝術と呼ぶ。

3　此の意味の感覺と感情とを表出する手段(材料)は適切にその感覺と感情とに對應しなければならぬので、手段が感覺と感情とを超越することも亦其の反對も許されない。換言すれば或る特異(ユニィク)の感覺と感情とを表現するには聯想といふ手段によつて示してはならない。その特異の感覺と感情とをただそれだけのもの即ち其れ以上でも其れ以下でも以外でもないものによつて表現しなければならない。これが象徴である。

僕の此の神秘的象徴主義からみた君は如何なる詩人であるか

「僕は長い以前から僕自身の眞に希求する、もつとぴつたり合致する作品をみないで善いといふならば大抵の作品はその何處かが善く、惡いといふならば大抵の作品はその何處かが惡いと言はれ得る程度のものに見へたが、近頃殆んど僕の希求に近い藝術家を見出すことが出來て非常に心強くもうれしく思つて居る。それは詩人としての山村暮鳥氏である。作品を通じてみた氏はどうしても僕自身の主張する神秘象徴主義の具現せられたものであると思つてゐたが、今や氏の創作の態度などを聞知するに及んで益々その感を強めることができた。氏の如く卓越した藝術家を其の眞價に於てみとめ得ず理解し得ない一般文壇は全く藝術家を待遇するの途を知らぬものと言はねばならない。」

而もいまは君に就てこんな嘆聲を漏らす必要もなく、君の詩はすべての眞面目なる人々の驚異となつてゐる。きれぎれにみてゐた君の詩がまとまつて一冊となり、どつしりした重みで日光の中へでる時、まことの生(いのち)の糧に餓へてゐる人達のよろこびはどんなであらうぞ！　それが目に見へるやうだ。

次に君について書いたのは「光陰」の「光りにあくがるる詩」の中である。

「山村氏の詩は確固と摑んでゐるものをそのまゝに表現する。山村氏の詩には宗教家の崇高(けだか)い安定がある。其の態度は感覺の如何なる印象にも打ち勝つてすこしの動搖なく、すべてそれらを同化する。氏の詩からは豫言者のもつ愛

情が湧いてゐる。氏の世界は全宇宙的であつて自然の一草一石も氏と共通のいのちを持つて居る。氏の感情は世界の創造者のもつであらう感情へ向つてあこがれる。したがつて氏の詩は個人的性格の感情を嚴然として批判し得る普遍的絶對的のものを示してゐる。」

此の言葉は最早、君に對してあまりに沈套なそしてあまりに平俗な頌辭となつてしまつてゐる。今、君の詩に讃嘆を惜まぬものは到る所にみることが出來る。

三度此處に君の詩について何事かをのべやうとしても、亦先きの言葉をくり返して君のその豊饒な天分を祝福するより外は無い。僕にとつては。

山村君

僕は哲學の一學徒だ。君とはまつたく別の方向に進んでゐる。君は直覺的に物を握らうとし、僕は握るまへに理知的に疑はうとする。君のやうに直截に物の攫める人は眞にうらやましい。近頃は殊に自分の思想をできるだけつきとめてみやうと思つて朝から夜までほとんどぶつ通しに机にむかひ、讀書と思索とに沈潛しつゝまとまるだけ多くを纒めてかいてゐるが其の間にただ四時から落日頃までを僕の散策の時間にとつておいて此の僅かのひまを自然の懷に抱かれやうとしてゐる。併し長い間、そうして室内に閉籠つてゐて自然界にでてみると自然はまるで自分をうけつけてくれない。そして思索と本當の物とはまつたく

別だといふ氣が切にする。そんな時、僕はすぐに自分を反省して、自分のすがたが餘りにみすぼらしく憐れに見える。だが亦斯んな時もある。思想上では全然中世期の哲學に近づいて、或る實際主義者現實主義者からはかの煩瑣哲學の亞流として排斥せられる其の著作にしたしみつゝ、自分の思想も次第にその方向にすすむやうになつて所謂現實所謂人生からはまるで阻隔してゐながら、洛北の圃の畝に腰をおろして夕日のやすらかにいり行くのを見遣る時、自分の心臓の皷動は遠い村村の家や森や竹藪にたなびく夕靄の中にきえていつてそこでひたすらに神を想ふやうになる。こんな時には自分の思想はすつかり自然と交融してゐるのを覺へる。或は亦斯んなこともある。いくつ

か連つてゐる寺寺の境内をそれからそれへと歩き廻つて、と或る御堂のおくの讀經の諧音に耳をすましたり、また禪庵の柱に懸けてある偈の章句を考へたり、超俗的な眉間の額面の文字にひたと見入つたりしながら、自分といふもの、自分の思想といふものを全く忘れてしまつたやうになることがある。こんなにして生活する僕にとつて迷執は常に離れがたい原罪(ウアジユンデ)である。思想上では變說改論まことに恒なく、實際どれだけが自分にとつて不可疑的の部分か解らなくなつて情無くさへなる。しかし其等のすべての時に亘り、ふしぎに君の詩は僕にとつて眞實である。僕の氣分などはまるでふわふわして好惡の標準が全然の反對から反對へと動きつつあるにも拘らず君

の詩はいつも僕に親昵感を與へるものである。それは實に君の詩の奇蹟だ。

山村君

僕の神秘的象徴主義が元來、大乘佛敎の哲理からきたものだといふことは君も知つてゐる。僕は始めプラグマチズムの現實哲學に執着してゐたが、其頃から僕の思想はプラグマチズムとはいはないで象徴主義と銘打つてゐた。後、次第に思想が深化して現今の所謂論理主義の嚴密さを味ひつつ、リツケルト、コオエン、フツサアル、ボルツアノとだんだんに固くなつてゆくにつれて僕の理知欲は一面に滿足させられたが他面の宗敎的要

求を如何にせばやと惑ふ樣になつた。其頃のことである。僕が專心大乘佛敎の中に浸つて佛弟子たる修業に志したのは「公準としての愛」といふやうなものも其の時に出來た。神秘的象徴主義の骨組もその頃に出來た。そして禪宗のやうな超俗的內面的な宗敎がその究竟境を示すときの偈を讀み、その表現があまりに現代フランスの象徴派詩人のそれと共通してゐるのに驚いた。更にすすんで君の先きの詩集「聖三稜玻璃」を一讀するや、誠に精神的に貧弱な現今のわが國に斯くも摩訶不思議の詩境にあそぶものがあるかと僕の心は君に對する驚異と畏敬とにみたされた。實にも靈性の深奥に秘密の殿堂をみいだすことは感覺のプリズムに富瞻の色彩を悅樂することである。それを知るも

のは君である。君のやうな徹底した象徴主義者は西歐にも其例を見ることができない。君が名辭のみを聯ねた詩の簡潔こそは東洋人の脈管からながれでた血のその純粹の結晶であらう。

僕の神秘的象徴主義の理論は此後いくらでも變改するであらうが神秘的象徴主義は何としても動かない眞理だ。それは藝術其物眞理其物の成立するアプリオリだ。否、凡てのアプリオリのアプリオリだ。而も君の詩はそれらの主義から超越してゐる。

今も僕は例の散策から歸つてきたところだ。いつもの道だが、加茂川から一二丁の間隔を置いて平行にはしつてゐる高い堤（それは往昔（むかし）の加茂川のそれではないかと）思ふの上を北の方へ

あるいて行つた。そこには丈の低い小笹が繁つて早くも春の雲雀が鳴いてゐる。ふと菜畑のほとりをゆるやかに何處かの鐘の音がながれた。僕はその音に聽入りながらつらつらと自然のあらはれの信實を思つた。何と言つても信實な眞摯なそして温良なものは自然だ。亦、いつも健全なのは自然だ。

山村君。君はつねにかのジアナリズムを排してゐる。それは僕も同樣だ。併しジアナリズムぐらゐが何だ。それはただ文壇といふ文化顯象の片隅にかすかに存在してゐるだけの事實に過ぎないではないか。現代の文明はもつと複雜だ。僕等には文壇のジアナリズムぐらゐではすまない大きな蠱惑や侮辱が絶えず

攻めよせて來る。時折は而かもほんとに癪に觸つて僕も一ばんその中で戰つてみせてやらうかと言ふ樣なむら氣が起る。しかしそれは僕等の生命が三つも四つもあつた時のことで、たつた一つしかない短い生命はそんな無意味なことに費してはならぬ。僕等は本當のものを掴まねばならぬ。すこしの妥協も拗氣もない眞摯に生きなければならぬ。眞に自分の滿足するものを創出せねばならぬ。そんな時に自然はいい僕等の指導者である。

君の詩は、恰もその自然の一片として生きてゐる。君の詩には詩人の詩臭ともいふべきものが無い。そして君ほど詩人の中で近づきやすく親しい感じをもつたものが何處にあるか。それは前の詩集に於いても今の詩集に於ても同じだ。君の前の詩集

を難解だと云ひ、君が此の詩集にあつめたやうな詩に對して奇蹟的の轉回だと云ふものがあるが、僕にとつては前の詩と最近の詩と、そのあひだに少しの差違もない。ちがつたとすれば君が或は感覺に或は直觀に、到るところ君の體驗を燃燒せしめつつあるのを外面的に見たからだらう。僕等の弱いそして傷き易いこころは或る時は悲めるものの圮れを歌ひ、或る時は惱めるものの自棄を誦する。併しながら其等はいづれも何等か我々のセンチメンタリズムに媚びてゐる。君の詩こそは自然のもつ健全にある。君の詩こそは創造者のもつ力にある。不斷、人間內奥のたましひのやしなひとなるものはまことに君の詩でなければならぬ。そしてそれは君の尊い人格の發現といふものだ。

山村君

君は此の詩集を人間におくるのだと言ふ。君の手は大きく且つ力強い。自由にまた大膽にその手をすべて人間の上に伸べたまへ。そして與へてやりたまへ。それは豫言者のみが獨り持つてゐる特權といふものだ。僕も亦君の詩によつてなぐさめられ勇氣づけられる一人であることを悅んでゐる。

千九百十八年三月

京都にて

土田杏村

後より來る者におくる

子ども等よ
いまは頭も白髮となり
骨が皮をかぶつたやうな體軀を
漸く杖でささへて
消えかかつた火のやうに生きてゐるお前達の
お爺さんを見な

あれでも昔は若くつて大膽で
君等のお父さん達が
いま鍬鎌を振りまはして田圃や畑でたたかつてゐるやうに
弓矢銃丸の間をくぐりむぐつて
いさましいはたらきをしたもんだ
子ども等よ
鐵のやうに頑丈であれ
やがて君達のお父さんがお爺さんのやうになる時

其時、君等はお父さんのやうな大人になるのだ
此の時代と世界とを
そして立派にうけ繼ぐのだ
その君達のことを思へば
此の胸はうれしさで一ぱいになるぞ
おお勇敢な小獅子よ
お爺さんよりお父さんより
君等はもつとどんなに強くなることか
こつちをみろ

自分の此詩集が日光の中に出るやうになつたのは親友早坂掬紫、平井邦二郎、前田夕暮等の友情によつてであることを大なる感謝をもつてここに記しておく。

更にこれらの名の中に自分は自分の妻ふじ子の名をもかき加へなければならない。

山村暮鳥の著作

印象……詩集（未刊）
LA BONNE CHANSON……詩集（既刊）
鸚哥小曲……詩集（未刊）
三人の處女……詩集（既刊）
光る噴水（「三人の處女」改題）……詩集（絶版）
造り花……詩集（未刊）
聖三稜玻璃……詩集（既刊）
BAUDELAIRE, PETIS POEMES EN PROSE……飜譯（既刊）
ドストエフスキイ書簡集……飜譯（新刊）
ドストエフスキイ……飜譯（未刊）
肉體の反射……詩集（未刊）
小さな穀倉より……隨筆（既刊）
風は草木にささやいた……詩集（新刊）

大正七年十一月十日印刷
大正七年十一月十五日發行

定價金壹圓五拾錢

著作者　山村暮鳥
發行人　早坂亥質　仙臺市片平丁四五
印刷人　鈴木杏策　仙臺市片平丁四五
印刷所　早川活版所　仙臺市片平丁四五
發行所　白日社　東京市外西大久保一二八

柯亭藏書